

サッカースクールの生徒とロシナンテスのメンバー（左端が海原さん、右端が川原さん）。ナショナルチームも利用するこの施設で少年少女約70人が練習を行っている ©内藤順司



One for all, All for one

「非力な僕らはやせ馬のロシナンテ」。だが、彼ら自身がそう考えるよりもずっと、その活動はスーダンの人々の心強い支えになっている。かつてラグーマンで“花園”を目指していた川原尚行さんの志は、今、高校時代のチームメイトの思いとともに、がっちり“スクラム”が組まれている。

忘れられない最後の試合

NPO法人ロシナンテスの誕生は、飲み会でのこんな会話がきっかけだった。

「外務省を辞めて、スーダンで医療活動をしようと思ってるんだ」

「それなら先輩、何かお手伝いさせてください！」

5年前、外務省の医務官だった川原尚行さんの一言に、高校時代の2年後輩の海原六郎さんは二つ返事でこう答えた。普通なら、考え直すことを論じたいような決断。しかし、海原さんの目は真剣だった。

その訳は、川原さん高校3年。大阪府の“花園”で開かれる全国高校ラグビー大会の出場をかけた最後の県大会のこと。花園行きはほぼ確実視されるほど、仕上がり十分だったチームにアクシデントが起こった。攻撃（フォワード）と守備（バックス）をつなぐ要のスクラムハーフの選手が出場できなくなったのだ。そこで急きょ抜擢されたのが海原さんだった。「入部して半年、プレーヤーとしての熟練度は低く、試合で体の大きな選手につぶされ脳振とうを起こしてしまいました」。



サッカーはスーダンで最も人気のあるスポーツ。紛争が続くダルフルでも村のあちこちでボールを追い回す子どもを見かける ©竹林尚哉

スーダンで見つけた真実

ロシナンテスの活動の中心は、無医村だったシェリフ・ハサバツラ村に立ち上げた診療所で、地元の人々の病気やけがを看ること。医師である川原さんが、スーダン人の医療従事者に技術指導をしながら運営に当たる。また、軽視されがちな女子の教育事業や母子保健活動も行っている。4月からはJICAの草の根技術協力事業と連携して、妊婦検診や乳児検診の普及、女性の健康教育にも力を入れていく予定だ。

こうした活動の中で、ロシナンテスが大切にしているのがスポーツ事業。ダルフルという不安定な地域を抱えるスーダンだからこそ、ロシナンテスの面々はこの活動の意義を感じている。「被害に苦しんでいる人々を直接助ける方法も一つですが、子どもたちに夢を与えることも必要です」（川原さん）。

どんな協力方法が有効だろうか。多くの話し合いの末、スーダンサッカー協会主催の少年サッカースクールの立ち上げることになった。サッカーはスーダン一人気のスポーツだ。また、地方の学校への巡回指導も行う。スポーツ振興を図ることで地方と都市部の格差を縮めるとともに、

とはいえ、スクラムハーフは専門的なポジション。ほかにこなせる選手はいなかった。「お前しかいない！」川原さんのその言葉に奮い立たされるように立ち上がった海原さん。しかし、全身全霊で戦うもチームは敗れ、川原さんら3年生は引退した。「勝てるはずの相手に負けただけです。自分が何の貢献もできなかったことが悔しくて、その思いがずっと心の傷として残っていました」

それから20年余り。久々に集まった席で川原さんの決意を聞いた海原さんの脳裏によみがえってきたのは、高校時代のあの思い出。「今なら役に立てるポジションがあるんじゃないか」。そう思って、川原さんのサポートを申し出た海原さん。部員だったほかのメンバーも加え、今

(右)文化的背景から女子教育が軽視されがちなスーダン。ロシナンテスではまず学校建設から取り掛かった (左)宗教上、肌を露出できず自由にスポーツを楽しめない女の子に対してサッカーを指導。今では大会にも出場できるほどレベルが向上した ©内藤順司



青少年の健全な育成に貢献できる。「あるときダルフルについて聞くと、スーダン政府、国連、欧米...と、みんな言っていることが違い、何が真実か分からなくなりました。でもその中で、一つだけ確かなことがあったんです。それは、子どもたちが全員夢中でサッカーをやっていたことでした」と川原さん。

彼らの心を支えるサッカー。これなら夢を与えられる。「ラグビーに、『One for all, All for one』という言葉がありますが、スーダンの子どもたちにはまず、自分がチームにどんな貢献ができるか見つけてほしい。そして、苦しいときはみんなでフォロロしようという気持ちを持つてもらえたら。さらにその先に、国のため、アフリカのため、世界のためという心が生まれてくれればよりうれしいです」（海原さん）

試合以外では敵味方もないノーサイドの精神。体当たりの激しいプレーの中で反則せず正々堂々と戦うフェアプレーの精神。ロシナンテスのメンバーに刻み込まれたこのラグビー精神は、対立構造の続くスーダン社会で多くの意味を持つ。決して非力ではない川原さんの行動力にブラッスされた海原さんらPLAYERSの熱き思い。それが重なり合う様子は、まさしくがっちり組まれたスクラムのように思えた。



巡回診療から始まった医療活動。診療所を拠点とする現在は、村人に限らず、周辺地域の人々にも開かれた場所となっている。村唯一の診療所。人々の川原さんへの信頼は厚い ©内藤順司



福岡県立小倉高校時代、苦楽を共にした川原さん（最前列右から2人目）と海原さん（最前列左端）。ロシナンテスの活動は、ラグビー部員、OB会、教職員など母校の関係者にも支えられている